

新任教員紹介

工学部・准教授・橋本信一

略歴

1990.05 オレンジバーグ・ウィルキンソン公立高校（米・サウスカロライナ州）卒業
1996.05 クレムソン大学（米）経営学部経済学科 卒業
1997.12 アメリカ創価大学大学院（米）外国語教授法修士課程（TESOL）修了卒業
1998.04-2002.03 創価大学 教務部 嘱託職員
2002.04-2013.05 創価大学 ワールドランゲージセンター 講師（特任）
2013.10-2014.03 電気通信大学 情報理工学部 非常勤講師
2014.04-2019.03 電気通信大学 情報理工学域 特任准教授
2019.04-2022.03 東海大学 語学教育センター 特任准教授
2022.04- 東海大学 工学部 准教授（専任）



担当科目

英語リスニング&スピーキング，英語リーディング&ライティング，グローバルスキル，アカデミック英語，基礎英文法，基礎英語，科学技術英語（EU 学科），英語アカデミック・プレゼンテーション（EI・ER 学科），国際理解

研究活動内容

1. 教育と就職の背景

英語教員として少し変わった経歴を持つので，自己紹介を兼ねて自身の教育と就職の背景を紹介する。

筆者は香川県高松市生まれだが，4歳の時にアメリカのサウスカロライナ州に移住した。平日は地元で小，中，高の学校に通いながら，土曜日には一時間離れた町で日本語の補習校に通った。19歳の時，日本語があまり喋れないことから創価大学の日本語別科に留学生として入学し，日本語を一年間学んだ。大学は若い時からロボット技術に憧れと興味がありクレムソン大学の工学部・電気工学科に入学したが上級生になるにつれ勉強についていけず，最後の2年間は経済学に専攻を変更し *Bachelor of Science in Economics* を取得し卒業した。大学院を選ぶ際，マルチカルチャーのバックグラウンドをいかせて社会に貢献出来る仕事は何かと考え抜いた末，英語を第二言語として教える教授法を学ぶと決めた。

修士課程を修了し日本での初めての職は，大学の教務部の嘱託職員だった。創価大学で数年前から新設されたワールドランゲージセンターのセルフ・アクセス・センターのマネージャーとして勤務。東海大学のアゴーラとイメージが似ているが，留学生スタッフと日本人学生が，英語オンリーで話したり仲良くなったりするスペースだった。多くの日本人学生が英語オンリーのポリシーに高いハードルを

感じ施設利用に躊躇し，利用者が伸び悩んでいた。その解決策として，必修英語科目の宿題として一学期に何回か訪れることを提案し，その予約システムなどを確立した。最初のハードルを下げ何回か利用するようになったら，英語を喋る楽しさが徐々に浸透し，課題では無い時でも利用する学生が増えた。

2002年に職員から教員のポストに移転し，授業を持つようになった。最初は一般的な一年生の英語科目を担当したが，2003年に工学部からの依頼があり環境共生学科の一年生に技術英語の授業を学科の先生と共に開発した。コースの目的は様々な環境問題を英語でディスカッションし，発表することだった。ここで大学時代の前半に学んだ化学，物理，数学などの知識が思わぬ形で役立った。2009年に工学部の3つの学科全てに一年生の工学英語科目が実施されるようになり，そのカリキュラム開発の先頭に立った。また二年生のライティング授業のコース作成を依頼され，工学部の学生に英語のライティングの基本を教えていく科目を開発。2006年からは工学部の大学院生が国際学会で研究発表できるようにプレゼンテーションスキルを強化する授業を担当した。

2014年，電気通信大学に学部技術英語のコーディネータとして赴任。3年生の必修，「学部技術英語」科目を担当し，プログラムの創始者の史先生のもとで5名のTAと10名の非常勤の先生を束ねる立場でプログラムを運営した。技術的な英単語を促進するアクティビティやライティングの流

暢さを強化するアクティビティ等を導入し、プログラムに幾つかの新しい提案をした。毎年学生の TOEIC-IP のスコアも少しずつ伸び、我々運営者の努力が実り学内の評価があがり、技術英語は学内組織として「委員会」から「部会」に発展した。

2019 年から東海大学に特任准教授として赴任し、今年専任教員として工学部の一員になった。今までの経験をいかし、工学部の学部生や院生に特化した英語の授業を發展させ、全員のスキルアップを目指していく所存である。

2. 研究活動の概要

2.1 ジャーナル掲載

ジャーナルで掲載された研究は様々な技術を使用している英語教育のアプローチを探っているものが多い。また、科研の分担者としてコラボレーションを通して多岐に渡る研究を行っている。主な研究分野は English for Specific Purposes (ESP), Computer-Assisted Language Learning (CALL), Collaborative Learning と Vocabulary Acquisition である。手短に論文の内容を幾つか紹介する。

Short-term Chaotic Time-Series Prediction of Language Test Scores Adopting the Backpropagation Algorithm (2016) では英語のテストの点数をカオス時系列として捉え、ニューラルネットワークを使い、短期予測をすることが可能だという研究。Reading and Summarizing in L1 and L2 Using a Social Networking Website (2015) では SNS を介してリーディングや要約のスキルを強化できるかの検証を行った。Development of Web-based e-Learning Programs for Extensive Reading (2013) ではブラウザーベースで多読を促進するプログラムの開発をした。

2.2 特許

科研グループで長年研究をした成果として、二つの特許を取得した。今年の 3 月に取得したのが第 7039015 号「教材学習スケジュール決定装置」。学習者がどの英語のスキルが脆弱でそれを補うための一番効果的な学習手順を示すソフトウェアの発明に貢献した。2013 年には第 5369463「多読・速読学習システム、多読・速読学習装置、多読・速読学習プログラム」学習者が英語のテキストをウェブ・ブラウザーに載せると、そのテキストの多読・速読をサポートする装置の発明に貢献した。

2.3 著書

国際語学社より幾つかの出版物が（単著や監修として）あるが、研究関連のものではなく、一般の方向けの英語の

本である。「私のアメリカ英語手帳」(2010)、「英語手紙の書き方」(2009)。また、共著で英単語の勉強をサポートする「頻出準英単語 2000+」(2014)や「パーフェクトフレーズ英語日常英会話」(2009)もある。

2.4 学会参加

研究分野の ESP と関連して、大学英語教育学会 (JACET) の ESP SIG 関東支部に所属。副支部長として 6 年間運営に携わり、去年から支部の学術誌の編集長である。その他、全国語学教育学会 (JALT)、映像メディア英語教育学会 (ATEM)、外国語教育メディア学会 (LET) にも所属をしており、今年初めて全国数学教育学会の大会で口頭発表を行った。2016 年 Joint International Conference on ESP in Asia の国際大会では事務局長として大会の運営をした。

2.5 口頭発表

研究で一番件数が多いのは口頭発表で、主なテーマは授業の工夫や取り組みである。常日頃より効果的な教え方や学生の学びが進む方法を探っている。

3. まとめ

これまで主に ESP 授業を担当し、学生のニーズに合うカリキュラム開発、教材作成、評価システムの確立など、様々な角度から授業を運営してきた。そして、沢山の教員や職員とのコミュニケーションを大切にする。授業の担当以外にも大学をサポートする業務にも携わった一学生の海外研修の引率、大学の発行物の編集、FD 研修の発表や運営等。これからも、「即戦力」として東海大学に全力で貢献したい。

参考文献

- 1) K. Kido, E. Fukuda, S. Hashimoto and H. Okazaki, Short-term Chaotic Time-Series Prediction of Language Test Scores Adopting the Backpropagation Algorithm, J. for Japan e-Learning Assoc. Vol. 16, pp. 65-72 (2016).
- 2) E. Fukuda, S. Hashimoto and H. Okazaki, Reading and Summarizing in L1 and L2 Using a Social Networking Website, OnCUE J. Vol.8, No.2, pp.83-105 (2015).
- 3) H. Okazaki, H. Nitta, S. Hashimoto, E. Fukuda and K. Kido, Development of Web-based e-Learning Programs for Extensive Reading, J. for Japan e-Learning Assoc. Vol.13, pp.40-48 (2013).